

---

# 大きな銃に小さな手

九条 ネギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大きな銃に小さな手

### 【Nコード】

N6906Y

### 【作者名】

九条 ネギ

### 【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコートがその特徴とされる『カフィン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

## 懺悔という名の自己満足

ごめんなさい。　ボク、悪い事をしました。  
何って、簡単だよ。　ボクが君に、悪戯をした。  
壊しちゃった。　捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。　ボクの頭はただの飾りだ。  
君の頭もただの飾りだ。　ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになったから、ボクに合わせて君を変えた。  
さて、君の身体はどうなったのでしょうか？

朝起きたら。　事故に遭って。　気を失って。  
いつの間にか。　知らないうちに。　気付かない内に。  
君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。  
風を流れる。　小さく弱い悪魔の手にかかってね。

『君は、何も知らないお姫様になったんだ。　ボクの気まぐれに  
当てられて』

## 懺悔という名の自己満足（後書き）

ぶっちゃけ、第三部辺りまでは暗いだけで面白みが無いかもしれないです。

## ぼやきと言つ名の自己満足（前書き）

この自己満足文は縦書き読向けに書かれています  
横書きなので若干読みにくいです

## ばやきと言つ名の自己満足

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言った。本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。

彼はその気に入っているコートに身を包み、事務所の外に止めてあったバイクにまたがった。闇にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。異様な雰囲気放っている。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。それは、ビルの屋上から見えている所為かもしれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだろう。ボクの手によって。

「中々、強いんだ」

ビル風によって吼えるような音が響く。ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく呟いた。

「侵入者だ、銃を持ってるぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティーが行われている。それを聞けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに来たに違いない』と、思うことだろう。

全く持って、その通りだった。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。

彼の通った後には硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、至って普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、型にはめられて量産されている。身分証名称を持って銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーノに用がある。死にたくなけりや、道を明ける」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。そんな死神のような一言は、聞いた者の戦意を瞬く間に消し去った。並の人間に、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？ いや、無理だ。奴はまだ武器を持っている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボディガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーノさんよ。面倒臭かったぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフィンか!？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。

……俺も、使われる人間なんだ、悪く思っなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫

き、砕く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務官完了か。……そのゴリラ」

ため息をつく、カフィンがボディーガードの一人に札束を投げ渡した。相当な額らしく、啞然とするほか無い。どういう、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた礼だ、俺が払ってやる。それと、早い所その馬鹿ブルーノを持って帰ったほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を撃ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だろうがその辺は俺の自由。

さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらうぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。



ぼやきと言つ名の自己満足（後書き）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

## 侵入者という名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルス性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかった。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざっと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はその二倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に一つの鍵で二つの鍵をあけるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。その組み合わせは“千四十序通りせんよんじゅうしよ以上”が存在する計算になるわけだが。

実際、鍵の形状の問題で十の十乗、百億通りがいいところなのが、それが二つあるわけで。現実的な数字は、二百億通りの開け方を試さなければ、この扉は鍵を持っていても開けない。

鍵と鍵穴の組み合わせを忘れれば、恐らく。誰にも空けられない開かずの扉になるだろう。

そして、その組み合わせはカフィンしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあけ終わると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入った？」

闇の中に居る“何か”に対し、問いかける。傘立に、見たことのないような白い傘が刺さっている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝え

ている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。揺り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？ 開錠して入ったか……？ いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？ 『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていれば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褄が合う。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

気配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。チョット待って、暗くて見えなくってさ」

高い、女の声。そして、闇の中を慌しく歩き回ると、どういうわけかその女は壁を叩き始めた。一体、何をやっている？

二秒ほど叩き続け、突然。事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。どうしてだ？

「何で、俺の名前を知ってんだ？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあった写真立を手を取った。アレンの、幼い頃の写真。孤児院の仲間と、一緒に映っている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かったな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引つ込めた。久々の、客。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。

殺し屋でも少し、嬉しかったりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いって言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やってるんだけど……」

……

楽しげだった彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこつちも状況の把握が出来ない。

「どうした？ 俺を殺せて依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇っていた。

「……そうなんだ。ボク、君を殺せて依頼を受けたんだよ」

「んあ？ マジだったか、そうか。んあッハッハ！ 大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になったような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？ 俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だった。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に対してであれ。非情になれるものだ。

手に握ったままだったマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身

体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？　少し痛かったかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がった。

ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いにする。ペンキではないようだ……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んでるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かったらごめんな」

「いつも、こうやって誤魔化してきたの？」

ユリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時に、ユリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。

「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返したよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……れ？　ずいぶん……強い麻酔……だな……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？　……実弾と間違えたかな？」

侵入者という名の自己満足（後書き）

序は数字の位

京の二つ上の位に当たる

## 性転換という名の自己満足

夜中、突如アレンは目を覚ました。それは、シャワールームから聞こえてくる水の音が原因というわけではない。

寝かされていたソファ横の机に『シャワー借りてるよ』という書き置きがある辺り、どうやらユリアの訪問は夢オチというわけではなさそうだ。メモを抑えていた自分の銃を引き出しにしようと頭を抱え、ソファにもう一度倒れこんだ。

床に倒れたと思ったが……よく持ち上げられたな。まあ、俺にそこまで物凄い体重があるわけではないが。むしろ、軽いくらいか？

にしても、即効性ってだけで結構弱い薬だったか？

「う……気分わりい」

思わず、そんな言葉がアレンの口から漏れる。

何だ、気分が悪い。酒を飲んで酔ったような……酒なんて飲んでねえぞ？

そんなことを考えている間にも、気分の悪さから発展したのか。頭痛がアレンを襲う。が、頭を抱えることしか出来ない。そうしている間にも、痛みは頭どころか、腹部を中心に。全身が烧けるような痛みが彼を襲う。

「マジで……どんな薬仕込んでたんだよ……」

損な小さな吐き出すような言葉とともに。アレンは一瞬痙攣したかと思うと、気を失った。

「うー……」

気がつけば、どうやら痛みは引いたらしい。全く、どんな強烈な麻酔しこんでたんだ？ ああ、あの弾丸。

ソファから起き上がると、視界に違和感を感じる。そして、顔の横から降ってきた黒い。長い髪の毛。

これは……一体？

「あ、目が覚めた？」

アレンに押し掛かり、ユリアが笑顔で拳銃を向けている。

「うわあああああ！？」

……まったく、事務所の中で銃向けるの止めるよ。侵入者に銃を向けてるわけでもなければ、俺を殺そうとしてもう撃つたろ？ 殺さない所を見ると、多分、ユリアの依頼弾丸を撃ち込めだとかそんなところなのだろう。

つか、いい加減俺の上から下りろ。

「中々、可愛い服でしょ？ 私の……学校の制服」

制服？ いや、普通にコート着てるだろ？ お前……。

「いや、それコートだろ？」

ここですよやく、アレンは自分の声の異変に気付く。明らかに、高くなっている。そして、この長い髪。

導き出される答えなど、知れている。どういう経緯でかは謎だが、現時刻を持って。殺し屋、『カフィン』は女の子になった。と、言う事だ。

「何だよ……これ……」

戸惑うアレンに、追い討ちを掛けるかのごとく。ユリアはアレンの服を指差している。

「私の学校指定の、制服」

アレンは恐る恐る、自分の身体を見下ろした。……よく分らないが、明らかにこれはスカートなるものである。そしてここでユリアの方が目線の高い事に気付く。身長が百六十程度のユリアより目線が低いのは、何だかショックだ。

「……一個断っておくが、俺は服装のことを言ってるじゃねえ」



大急ぎで事務所の中を駆け抜けると、洗面所の鏡に向かう。

「……これが、俺かよ」

アレンの自分を見た第一声。透き通るような、ソプラノの通る声が、洗面所に響く。

「可愛いでしょ？」

追いかけてきたユリアの口調。そしてその表情は、明らかに何かを“知っている”と言っていた。

「お前……その顔はどうしてこうなったか分かってるだろ……」

「うん、昨日打ち込んだあの弾丸。あれね、ナノマシンで身体を最適化する効果があったんだ。まさか、女の子になるとは思わなかったよ」

ナノマシン？ また新しいのを開発したのか、あの馬鹿研究機関のイカレ学者ども！

「……最悪だ、今日は面白そうなイベントがあんのに」

## 先読み不能と言つ名の障害（前書き）

さてさて、この辺からネギは暴走しようと思います（笑）  
なにがどうなったらこうなっ た のノリが若干この辺から入ってくる予定

## 先読み不能と言つ名の障害

「面白そうな……イベント？」

ユリアは不思議そうに、アレンを見た。

「ああ、詩人の幹部から、スカウトを受けた。 “うちで働かないか” って」

アレンの言葉に、ユリアも納得した様子で手に持っていた銃を腰に挿す。

「成程。確かに、カフインは殺し屋の最上位とまで言われてるからね。 ミンストレルからスカウトがあつても不思議じゃないし……今までに何度もあつたんじゃないかな？」

「ああ、いままでずっと断り続けた。 今回は、条件付でオーケーしてやったけどな」

ユリアの制服の上着を脱ぐと、アレンはいつもの黒いシャツを着ようとするが、中々着れず、着るのに手こずり、腕を通してきたみたものの、ダボダボでサイズが合っていない。

が、構わない様子でスカートを脱いだ直後。 彼は。 いや、

彼女は赤面した。

自分の穿いていた物をみて、絶句する。

「可愛いショーツでしょ？」

黙っている彼女に、ユリアが言い放つ。

「何着せてんだ、俺はお前の着せ替え人形じゃねえぞ！？」

「いやーん。 怒らないでよ、怒っても可愛いだけで怖くないけど。 安心してよ、その辺のコンビニで買ってきたものだから」

く……クソ……。 完全に、舐めきつてんな、ユリア。

再起動してショーツを脱ぎ捨てると、いつも何時も通り。 自分の着ている服装で、黒いコートを羽織るが中々どうしてこう様にならないのか。

男の時との身長差が十センチ以上あるため、明らかに変だ。

鏡を見て、アレンは思わず黙り込んだ。そして、数秒の空白の後、口を開く。

「なあ、これ戻せないのか……？」

悲痛な、一言。それに対し、ユリアは笑顔を向ける。

「戻せるよ」

予想外の答え。

「ナノマシンを、もう一度打ち込めば良い。ただ、撃ち込んだ時と同じで痛いけど良いの？」

ユリアの言葉に、アレンの表情が一気に晴れる。

「痛みは、耐えればいいだろ？ 戻してくれよ」

アレンの答えを聞いて、ユリアは携帯電話でどこかにメールを送る。

「一応、確認とっておかないといけないから少し待って」

そして、その十分後。ユリアの携帯の着信音の後、ユリアは無言でアレンに頭を下げた。

「ごめん、無理だった」

予想外の答え。

「戻せるんじゃないかったのかよ！？」

アレンが半ば叫ぶ。が、怯むことなく、

「戻せるように造ってあったはずだったんだよ。けど、打ち込まれた後もナノマシンは増えながら進化を続けちゃうから。ボクたち人間の予測と頭脳じゃ、どう進化したのを破壊するか。先読みして破壊するのは無理なんだって。それに、もう一度打ち込んで戻そうとした被検体が全滅したって報告書まで画像添付してきてる」

ユリアの言葉に、再びアレンは落ち込んだ様子で事務所のソファに腰掛けると、引き出しに夜の内にしまっていた拳銃を取り出すと、腰に差し込んだ。

「……まあ、仕方ないな。死ぬモンじゃねえし、何より、詩人の連中を待たせると後が面倒だ」

先読み不能と言つ名の障害（後書き）

Minstrel

minstrel

直訳で吟遊詩人

## 認識不可能という名の障害

コートのサイズなど気に留めることなく、アレンはバイクにまたがった。そして、アクセルを靴のつま先で蹴飛ばした。バイクだけは、特注だ。

手元にブレーキを付けておいて、今は良かったと思う。

今の身長では、どうしても足のつま先でしかアクセルに届かない。身長が十センチ低いだけで、ここまでの落差が出るものなのか。アクセルを蹴った足で、バイクの側面に引っ掛けた合ったヘルメットを蹴り上げ、右手で手に取るとそれを被る。が、髪の毛が邪魔だ。

「髪、切つてくりや良かったか……？」

事務所には、ユリアを残している。基本的に、あの事務所に隠すものなど無い。アレンが男でも、いかがわしい写真集がベッドの下にあるわけではない。あるとしても、二階の壁や一階の台所の床を叩くと板が回転して出てくる拳銃コレクションしかない。他にあるとしても、兎のホルマリン漬けや、ハツカネズミの剥製など。全くわけの分からないガラクタしか見つからないだろう。

信号で止まると、アレンはヘルメットを取り、視界にチラホラ入り込んでくる長い髪をその中に入れなおす。信号が青に変わると同時に、アクセルを蹴飛ばすと速度を上げた。

風を切り、ビル群の中を切り裂くように疾走する。しばらく走り続けると、ようやく。指定された場所へと到着した。

場所は、とある廃墟。調べた情報によると、一週間後から解体工事が始まるらしい。その、地下駐車場で、待つとのことだ。

その日のうち、正午以降であれば時間の指定は無い。ただ、深夜十二時を過ぎた時点でこなければ、話しは無かった事になるらしい。

詩人という規模の知れない巨大な組織は、アレンのような裏の人

間には魅力である。秩序維持を盾に、堂々と仕事を行える。が、場合によって。

今回のように呼び出された後に、待ち伏せにあって死ぬ場合も多いらしい。

「さて、鬼が出るか……蛇が出るか」

アレンは平然と金網を突き破り、駐車場に乗り入れると地下への通路を突っ切った。灯がある辺り、誰か人間が居る。

バイクのエンジンを切ると、地下駐車場のど真ん中で、アレンは待った。ヘルメットを被ったまま、堂々と直立している。

撃つのであれば、良いのだ。だが、殺される程度のリスクは、アレンにとっては特に大きなものでもない。このまま、アレンを殺すつもりならば。詩人の連中は躊躇無く、このビルを解体爆破するだろう。だが、駐車場に入り込んで五分経つが、一向に爆破する気配が無い。

それどころか、人の気配一つしない。と、感じていた。

だが、それは思わぬ所から最初から、アレンの目の前に居た。

「君が、カフィン？」

第一声。目の前で、無尽の空間から聞こえる声。だが、そこに人は……居た。いつの間に？

「ああ、そうだ。お前……いつからそこに？」

「君が……来る五分钟前から。君が、僕の存在を景色としてしか認識できないのは、僕の生まれつきだね。……おっと、自己紹介をすべきだったね」

白髪の男は、その死んだような瞳でアレンを見た。だが、実際はアレンと目を合わせないように必死だ。彼の瞳に仕込まれたカラーコンタクトがアレンを注視し、実際の眼球はあさつての方向を向いている。

「僕は、音無<sup>おとなし むおん</sup>。ミンストレルの、戦闘部隊、蜘蛛の隊長を務めているんだ。ああ、出来れば僕をそんないでくれ。



僕は、人と接するのが苦手なんだ。昔、友達だと思っていた人にタバスコジュースを飲まされてね。それ以降、僕は人を信じていないんだ」

彼はアレンと目を合わせないよう、ついには真横を向いてしまう。何だ、この奇妙な面白人間は……。

「お前の情報はどうでも良い。こういったトリックだ、俺の視界に居ただと？」

変声機を通したアレンの言葉に、呆れたように無音はため息をついた。恐らく、アレンの考えている事。そして、隠している事を見抜いている様子で。

「僕の、能力だ。インビジブルサイン不可視の標識、が、僕の生まれつきの力でね。僕から接触しなければ、僕は景色にしか見えない。君だって、そうだろ？ カフィンって“黒ノ棺事件”から活動しだしだし。

ちなみに、僕の能力レベルはマイナス？だよ。危険度はSSクラスオーバーだけだね。目を合わせたくないのもそれなんだ。能力者の中に目が合っただけで僕を殺せる能力があるかもしれないし、何より君がそうかもしれないだろう」

無音の言葉に、アレンは驚いた様子で。そして、不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。で、俺の姿は分かっているのか？」

「ああ、写真もあるぞ」

無音はポケットを探ると、アレンに投げ渡した。今、明らかに写真からも目を逸らしたろ……。

無音の持っていた写真は、男。そして、今のアレンは……女だ。「名前は割れてるのか？」

アレンの言葉に、今度は違うポケットから無音は手帳を取り出すと赤い付箋のページを開き、軽く息を吸い込んだ。そしてそれをゆっくりと読み上げる。

「アレン・ブラックウッド。分かっているのは名前だけじゃない。

フィオ・シュレーディングアの孤児院出身。その孤児院の火事と同時に、黒ノ棺事件同様。棺に詰め込まれた盗賊が蒸し焼きにされていたのが、君である決定的証拠かな」

若干、面倒くさそうに手帳に貼った新聞の切抜きをアレンに提示する。

「僕は人間の顔見たくないんだけどさ。確認義務があるんだ、そのヘルメット……いい加減とつてよ」

無音の言葉に、一瞬アレンが硬直する。

「……多分、その写真と姿は違うぞ？ いや、違うな」

「別人であれば、殺せと言われてきてる。別人とか、影武者なら……今の内に逃げることをお勧めする。けど、逃がすつもりも無いかな」

腰の鞘に突き刺さっていたナイフを手にとると、無音はアレンに対して構える。が、アレンは動じる様子も無く、躊躇することなくそのヘルメットを脱ぎ捨てた。

コンクリートの地面に、ヘルメットがぶつかる音と同時に。その場の静寂を切り裂くように、金属同士の衝突音が闇に響く！

衝突音の直後。長い黒髪を散らし、アレンは音無の握ったナイフを避ける。避けた直後、銃のグリップを音無に叩きつけると、音無はそれを握り、力任せに引いた。その弾みに、アレンは音無と目が合った。アレンの攻撃的な青い瞳と、音無の死んだような蒼い瞳が合った。

直後、音無はそっぽを向くと、距離を設けてカラーコンタクトを捨てた。

今度は堂々と、アレンを見据える。

「へえ、ずいぶん可愛らしいね。影武者かい？ 僕を……見るなよ！」

突然だった。突如狂ったように、おびえた様子で。無音はその刃を振りかざす！ が、それをアレンは銃の背でいなし、無音の頭に。その銃口を突きつける。

「引き金引けば、お前は死ぬぜ？」

威嚇するように。その鋭い視線が、言葉が、無音に突き刺さった。

「引けばいいじゃないか。僕は、この世の中を呪いながら死ぬだけだ。何でも良い、僕を見るな」

無音もまた自分同様、死を恐れない人間か……。悲しいな、こういう人間を見るのは。

「いや、殺せねえ。撃たれてみるか？ この銃で撃たれても、五時間くらい寝るだけだ」

アレンが銃の撃鉄を引くと、音無しは諦めたように態度まで大人しくなった。

「……君は眼を合わせても殺す力はないんだね。……表に、僕が呼んだ車が来る頃だ。それに乗るか、バイクで付いて来てくれればいいよ。君は、カフィンの偽者だとしてもスカウトするに値するほど強い」

音無の言葉が終わると同時。駐車場の出入り口からクラクションの音が、コンクリートの壁に響く。

「ああ、これだよ」

## 認識不可能という名の障害（後書き）

音無君登場！

次は童子を出したい所だけど、キャラの関係上出せないという悲劇が

そうだな、天才だったし

ナノマシンの開発者で出そうかな……？

§ネギの気まぐれ解説§

能力者レベルは、能力者の魔力の含有量

危険度は、その能力そのものの危険性

能力者レベルが高ければ、その分能力の発動時間が長く

危険度が高ければ、その能力を悪用した場合の被害が大きい。

能力者レベルに差があろうとも？である能力者と？の能力者が戦ったとして

レベルではなくレベル上位者以上に危険度が高ければレベル？がまず、勝つことになる

人間で現在確認されている能力者のレベルは、マイナス？～？。

ゼロも存在

危険度はF～SSまで

後に、作中でこのことは少し触れる予定

## 仕事の質問という名の壁

無音の指示で、黒いコートの大柄で強面の部下達がテキパキと仕事をこなす。騒ぎによって通報を受けて来た警官を誤魔化し、アレンのバイクをその黒い車の後ろに括り付け、そして手の空いている者が“カフィン嬢”をエスコートするわけだが。

“カフィン嬢”は前二つは良いとして、後の一つ。エスコートというものが気に入らず、むくれている。

「なあ、無音。俺は、今どんな扱いなんだ？」

思わず、無音に問いかけるも、無音は指示出しに忙しいらしい。

こちらの質問に答える気配すら見せなかった。仕方なく、真横まで歩み寄り、

「おい、俺の今の扱いはどうなつてんだ？ 危険人物か？」

耳に直接、その言葉を流し込む。

途端、驚いたように無音はアレンから遠ざかった。

「ああ、君の扱いは丁重にって指示してる。けど、彼らが何かしたかい？ 十分もしたら、僕たちは拠点へ行つて、ボスに君の事を報告させてもらう。で、運が悪ければ君は死ぬかも。ケド、僕は、守ってあげるから安心してくれていいよ」

真赤な顔で、アレンに返す。　　「どういうわけか、やはり顔を合わせようとはしない。」

視線が合つても、死なないって分かつたろ？ 何でまだ、視線を逸らすのかね。

「カフィン嬢、こちらへ」

部下の一人が、車の戸を開きスタンバイしているわけだが。アレンはそれに対し、不機嫌な様子で『アリガト』と小さく呟くと警戒することなく車の中に乗り込んだ。

「さて、吟遊詩人<sup>ミニストレル</sup>第二支部へ向かってくれ。新人の戦力テストをする必要がある」

いつの間にか車に乗り込んでいた無音は、運転席の部下に指示出しを続ける。　どうやら、人と接するのが苦手と言っていたわりには、カリスマ性があるらしい。

その間に、部下の一人がアレンに紅茶を勧めてきた。　どうやら、無音の気遣いらしい。

的確な指示を、順序良く出すのは中々、人間嫌いや自閉症の人間にできる事ではない。

「さて、アレンだったよね？　僕の質問に、答えてもらうよ」

車が走り出すと、無音は再びさっきの手帳を開くとそのページに記されていた質問文を読み上げる。

「質問その一。　君の能力は？　恐らく、君がこの間襲撃した兵器会社のパーティー会場に残されていた黒い塊と関係があるんだろ？」

思わず、アレンはいましたが勧められた紅茶を噴出しそうになった。

いきなり、能力者の。　殺し屋のトップシークレットである能力について、聞くか？　まあ、この場合は答えるべきだが。

「能力名は黒<sup>ブラック</sup>ノ<sup>カフィン</sup>棺。　対象の持つ物質エネルギーをそのまま利用して、俺にもよく分かん黒い塊にする力だ。　固まりになった直後、運動エネルギーは消えるからな。　カフィンの襲った所に時々落ちてた黒いビー玉は塊にされた弾が縮小したものだ。　大きさによるが、金属だったら能力発動から数秒で百分の一以下に縮小するからな。　恐らく、ビー玉大だったら大型の対戦車用の大砲だろ」

彼女の言葉に、無音は驚いたような表情で彼女を見つめる。　彼女が無音の方に疑問符を浮かべつつ顔を向けると、無音は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。　そして、手帳に走り書きを残すと再び口を開く。

「質問その二。　能力者レベルと、危険度ランクは？」

無音の言葉に、アレンは微笑した。

「能力者レベルはゼロ。　危険度はSS。　俺は、魔力なんて持

ってねえよ」

アレンの述べた数値を、無音は再び手帳に書き込む。

「へー、君はレベルゼロなんだ。道理で、話しかけるだけで僕に気付いたわけだ。皆、僕が触れないと気付かないのに」

ポケットを漁ると、無音は更にマーカーを取り出し、レベルゼロという部位に伏線を引いた。

「最後の質問。 彼氏は居る？」

アレンは思わず、その質問に言葉を失った。 これは……

「まさかとは思うが、お前個人の興味本位とか……無いよな？」  
アレンの言葉に、無音が一瞬反応したような気がした。

「え？ 違うって、違うよ。 僕の興味本位のわけないじゃないか、仕事だし！ へー、僕が君に恋愛感情を？ あるわけないだろう？ 君は、書類上男なんだから！ 第一、僕より強い阿婆擦れさんに、僕が興味を持つわけが……」

直後、慌てふためいた様に無音は弁解を始めた。 さつきから、  
どうもこの男の思考は読めない。

「…… どうでもいい質問だな。 これは答えるべきか？」

「…… どうしても嫌なら、答える義務は無いよ」

どうにも、この様子は仕事上の質問とは思えないが、仕方ないな。

「誰も…… 好きになったことが無いな。 言われてみれば、仲が良かったのはユリアだけだ」

アレンの言葉が終わる頃、窓の外から。 大きなビルが近づいてきた。

## 自己流という名の壁

しばらくして、車はその太陽を飲み込むような。大きなビルの駐車場へと入った。

見れば見るほど、そのビルは大きい。そして、奇妙な見覚えと地面の所々に点々と落ちている空薬莢。そして、バイクが走り去ったようなタイヤ痕。

アレンの頭の中で、三秒間。この場所に関する記憶の搜索が行われ、結果。ここは、昨日襲撃したビルだということが判明した。上を見上げれば、十二階に当たるフロアの窓の修理工事が行われている。昨日、あそこから飛び降りたのは言わずとも。着地のとき、少し足が痛かったつけ？

「……そうか。昨日の依頼、詩人のテストを兼ねてたのか？」アレンの言葉に、無音が驚いたような表情を向ける。

「あれ、場所分かんない様に回り道しまくったんだけどな。まあいいよ、後々分かる事だし。今気付いちゃっても」

それを気にした事もない様子で。入り口を通過すると無音は自分のことに気が付いていない受付の頬を突いた。中々の美人なのだが、お構いなし。

受付の彼女は、無音に気付くと、彼に銀色の鍵を手渡した。どうやら、俺のことは既に伝わっているらしい。

「で……テストとか言ってたな」

「ああ、言ったよ。何をするかって？ 簡単さ。銃とナイフを持って模擬戦闘を行ってもらおう」

無音に言われるがまま、迷路のような通路を付いていく。途中、大きな体育館のようなフロアを通過する際。飛んできたバスケットボールを蹴り返し、アレンはそれをゴールポストに叩き込んで見せた。

「自己流？ 強いね」



無音はそれを見て面白そうに笑っている。

「さて、到着」

連れてこられた先。それは、ワンフロアの中にボクシングのリングのようなフィールドが無数に設置されたトレーニングルームのような。ただ、よく見ると壁に血痕などがある辺り。そんなスポーツを行うところではないらしい。

「さて、少し待ってて。人呼んで来るから」

その言葉の直後。無音の姿が、アレンの視界から消える。

甘く見ていた。姿を認識できないだけとはいえ、ここまで強力なものは殆ど無い。相手に認識されないのであれば、近づいて急にナイフを差し込むだけで。

ただ、近づいてナイフで刺殺可能なのだ。相手に気付かれなければ、ほぼ確実に一撃で葬れる。

「さて、お待たせ」

案外、時間は掛からなかった。待ったとしても一分も無い。

無音と、もう一人。

黒髪の男が、サングラス越しにアレンを見つめている。

「お前が、“カフィン”か。中々、可愛い姿をしているんだな、殺人鬼。俺は、ルイス・オールディントンだ。音無と同じで、遊撃部隊“蝸”の隊長を務めてる」

「さて、テストは簡単だよ。僕が言いっ言うまで戦えばいい。怪我させても言いし、怪我させられる事もあるだろうし。下手すれば、死ぬから。で、ステージはあれにしようかな？」

無音が、フロアのと真ん中を陣取っている金網のリングを指差し嬉々として言った。どうやら、逃げ場は無い。そして、こちらにとつての利点は無いらしいが、どうやらルイスの反応からしてルイスの嫌いなフィールドらしい。

少し、こっちが有利か？

「じゃー、ルール聞いたところで。早速だけど、始めっぞ」

無音から銃とナイフを受け取り、アレンが金網の中に踏み込むと

同時に金網が閉じた。上下左右、逃げ場は無い。続いてルイスが、アレンの正面の入り口からリングへ入る。同じように、金網が閉じた。

「じゃ、スタート。能力の使用はありだよ」

無音の言葉に、早速、ルイスは能力を発動させたらしい。手の甲に刻まれた歯車の刺青が、音を立てて回転する。

「じゃあ、お前が女ってことで一つハンデをやる。俺の能力は、身体能力の強化だ」

「しらねーよ」

ルイスの言葉を聞き流し、アレンは『パァン』というラップ音とともに、ルイスを力任せに蹴り飛ばす！ が、ルイスはそれを左手で受け止めると、それを引いてアレンを……壁に叩きつける！

「自己流の体術か？ 結構、自己流ってのは聞こえがいいだけで……弱いぞ」

## 自己流という名の壁（後書き）

どうやら、予約掲載の時間を間違えていたようです  
本当は、零時に掲載したかったのですが

私の手違いで十一月ではなく十二月の二十四日になっていました  
リア充……まあ、早くなりたいかも（笑）な今日この頃です

## 超高速という名の壁

アレンは投げ飛ばされた先の金網を蹴り飛ばし、加速する。そのまま、空中で蹴りを繰り返すも、ルイスはそれを片手で容易く受け止める！

「こりゃ、驚いた。ここまで強い我流体術は始めてみた。が、甘すぎるぜ？」

彼の一言。そして、浮き上がる体の感覚。

上に……投げ上げられた！？　まずい、受身が取れない。

「空中ほど、避けるのに適してねえとはねえよな！」

恐ろしい速さで、ルイスの拳が落下するアレンめがけて突き出される！　空を切り、タイミングも完璧だった。

これを受ければ、ほぼ確実に骨が折れる。何より、男のときよりもこの体……脆い！

「いや、案外……」

アレンは頭から落ちることを選択すると、ルイスはいい的だと思ったのか。アレンの顔面めがけ、鼓舞しろ叩き込む！　が、アレンのほうが一瞬早かった。

叩きこまれた拳を、受け止めると、その腕の上で倒立。体を倒し、ルイスを地面に叩きつける！

「避けられなくもない。つーか、女相手に手加減ねえのな」

「男って、聞いてたからな。俺も嫌なんだが……仕事なモンでね。人情とかなんて、言ってるんねんだ。間違った正義も、群れば正義だ」

ルイスの言葉の直後アレンが爆発音とともに床に足形が残るのではないかと思うような勢いで、床を蹴り飛ばしてルイスめがけて突進する。床を蹴り飛ばした後には、あの黒い塊が。アレンの速さは、異常だった。人間である以上、超えられない力の壁を突き抜けたような。

人間が走った場合。瞬間的に出る最高速度は時速五十キロがい  
い所らしい。だが、アレンの身のこなしはそれを遥かに凌ぐ。  
文字通り、目にも留まらぬ速さで、ルイスにその細い腕を振るうと、  
拳を顔面目掛けて打ち付ける！

「つてえ……。……何をしでかした？ お前の力は、黒ノ棺だ  
る？」  
ブラックカフィン

「生憎、こつちが本当の使い方だよ。今の言葉を吐いた奴は……  
ペイント弾は使わねえって決めてんだ」

静かにゆつくりと。まるで、先日の襲撃時に見せたあの威圧同  
様の殺気を漲らせ、ルイスを威圧する。

「じゃ、何を使うんだ？ その化け物みてえなスピードか？」

「いいや、実弾を使わせてもらってる」

その手に握る銃のグリップをその小さな手で握るとアレンは撃鉄  
を引いた。大きな銃に小さな手をめいっばい広げ、それを握り締  
める。

その開き切った瞳孔と狂気表情は見る者に畏怖の念を植えつけ  
る。視線の先に居るルイスですら、それなりの数の死線を超えて  
いる人間だったのだろう。自分に対するこの圧倒的威圧が信じら  
れない様子で。動く事を忘れて立ち尽くす。

「へ……。へえ。で、俺を撃ち抜くわけだ」

アレンの答えより先に、発砲の爆発音がビル内を駆け巡る！ そ  
の細かな振動に、リングの金網の上に積もった埃が舞った。

「さアな？ いつも通り、確かに撃ったぞ」

ルイスの額を、アレンの放った弾丸が捕らえた。弾丸は額に着  
弾し、吹き出す血に、アレンの満足げな表情。

それは見るものに不快感を与えるような。強烈な負の思念を剥  
き出しにしていた。

「……で、無音だったっけ？ これで、良いか？」

握っていた銃を金網越しに無音に投げ渡すと、前のめりに倒れた  
ルイスに背を向けた。背を向けてしばらくして、彼は額にこびり

ついた紅い液体をポケットから取り出したタオルで拭った。

「……くっせ。 何だ、この臭い？ 鉄か？」

「錆びた鉄粉を少々、混ぜ込んで。 死の偽装工作だ。 で、もう一度聞くが、これでいいのか？ 無音」

アレンの問いに、無音は黙って頷くと金網を持ち上げた。 二人がリングから出たことを確認し、鍵をかける。

「……結果が出た。 カフィンの戦闘に関する総合技能。 パワーはS、スタミナはB、スピードはSSオーバー。 技能に関しても、SSオーバーだった。 で、これをボスに報告してくるわけだが。 その間、このビル内で待機していて欲しい。 そうだな、ルイス」

「何だ？」

「三階に良い喫茶店があった。 彼女にデートを申し込んでみたらどうだい？」

無音の言葉に、思わずアレンは絶句した。

男とデート？ 冗談じゃない。

「そうだな」

「俺が断る。 勘弁しろよ、俺はこの身体になってまだ一日も経ってないんだぜ？」

アレンの言葉に、ルイスは興味ありげに。 不信感を抱いた様子でアレンを見つめた。

「そうだな、可愛い色白の黒髪美人になって一日経ってないって、どういうことだ？」

ルイスの問いに、アレンは不満げに口を開いた。

「殺し屋“カフィン”は昨日の夜に事務所に侵入した別の殺し屋が打ち込んだナノマシンによって、この姿になったってことだ」

## 超高速という名の壁（後書き）

今回より、五日間

更新はお休みさせていただきます

と、休み報告のかなり不確かなネギが言っていますが  
今日明日の更新の可能性は中々高いです（笑）

ただ、更新したとしてもしなかったとしても

三日後に、私が今までやってみたかったことを仕出かしますので  
まあ、やらかしても温かい目で見えていただけると幸いです

## 見た目という名の壁

「一体……どういうことだい？」

ルイスを見ないよう、そっぽを向いた無音が、アレンを問い詰める。だが、アレンの言葉以上に、今現在の彼の状態を簡潔に表せる言葉は無い。

「昨日、懐かしい友人が事務所を訪ねてきて、俺とじゃれた時に、ナノマシンを打ち込まれた」

アレンの説明に、相変わらずルイスは疑問符を浮かべている。

「つまり、ナノマシンでその姿になった……ということか？」

「ああ、そうだ」

「元は、この写真の姿で間違いないのか？」

ルイスは、無音のポケットから写真を引き抜くと、アレンに提示。アレンは黙って頷いた。

「つまり、元は男……ってことか？」

「ああ、そうだ」

「ナノマシンは、どうするんだ？ 変身をキャンセルさせて破壊できないのか？」

興味本位。そして、半ばまじめに聞いてくるルイスに、アレンは携帯電話の画面を突きつける。

“ 新型ナノマシン【クレクトリプレイ】に関する実験結果 ”

そんな見出しの下に、検体名と死亡日時。そして最後のはまめまで。しっかりと記された研究レポートが、アレンの携帯電話の画面にはキッチリカッチリと表示されているわけで。

無音は元より、ルイスは言葉を失った。

「な、男とデート……だろ？」

アレンの言葉が、ルイスに耳に入ると同時。ルイスは気が付いたようにアレンを見つめた。そして……

「ま、何でもいいか。戻せないなら、今後どうするか考えると



しよう。無音、身体計測を手配してくれ。もちろん、計測対象は女性な」

「分かった、任せてくれたまえ」

あさつての方向を向いたまま、無音はルイスに言葉を返す。

「なッ……待て待て待て！」

二人の進んでいく会話に、アレンは個々でようやく取り残されている事に気が付いたらしい。相当慌てた様子で、二人の間に割ってはいる。

「俺は、いい！身体計測は止めろ、女向けってことは女がやるってこつたる？」

「ああ、そういうことになる。お前だって男の目の前で脱ぐのは恥ずいだろ？」

猛反発するアレンに、ルイスはなだめるように言い放つ。

「ああ、その方がな！」

ただ、ルイスに気遣いも無意味に終わった。

「あのな、大体その格好で裸になるんだぞ？分かってんのか？」

「ああ、んなことは百も承知だ！」

「悪いが、ボスに報告して来ていいか？時間が詰まってる」

大声でとなるアレンと、それをなだめるルイスの間を横切つて。

二人に気付かれる事なく無音はその場から消えた。無音は初めて、気まずいこの場からいとも容易く脱出させてくれたこの能力に感謝したかもしれない。

## 見た目という名の壁（後書き）

さてさて、予告通り

これを手始めに

本日は二時間置きの予約更新をやるうかと思えます

『ネギの気まぐれ更新』タグ、つけておいて良かったと今はじめて  
思いました（笑）

実際、一時間おき更新がやりたかったのですが、テストという壁が

……orz

## 毒蜘蛛という名の罖

『中々、面白い人材を見つけたものだな。 無音』

ミンストレル

携帯電話越しに、無音の話す相手。それが、この吟遊詩人のボスであり、変声機を通している辺り。男性化女性化の判別も出来ていない。謎の塊であり、その所在する、一部の幹部にしか知らされていない。

ただ、中には背景に流れる音を聞き分けて位置を特定したというキレ者もいるわけだが。それは一人しか居ない。

「ええ、中々面白いだけではありませんでしたよ。戦闘能力も中々のもので、総合評価がSクラスの上位。能力の幅は未知数ですが、ご報告申し上げた事柄だけで。どうやら“彼”の考えている以上に。あの“黒い物体”には奇妙な力があるようなのですが。どうも、小さく縮小されたものは直ぐに風化してしまうようで。

現在収拾に手間取っている所です」

携帯電話を握る手とは逆の手に、握られたビン。その中には、アレンの能力で発生したあの“黒ノ棺”の欠片がそこに少しだけ溜まっていた。

「どうやら、この物質。いわゆる暗黒物質ダークマターのようでして、恐らくは。後にサンプルをお送りいたしますが、輸送の途中で風化する可能性もございますので。その時は、悪しからず」

電話を切ると、無音は小さくため息をついた。ビンの中に溜まっている物体に目をやり、

「……オリハルコンか」  
小さく呟いた。

「嫌だ！ ふざけんなその服装じゃ可愛くないって言っただけだろ？」

無音が二人のいるであろう食堂に向かうと、そこに二人は居なか

った。実際にいたのは、食堂の横。呉服店。

「何でメイド服なんだよ！ スカートも駄目だ、無い！」

「そんな釣れないこと言わないで。ほら、このスカートとかどうかしら？」

ルイスと、店員が一緒になってアレンに“女物の洋服”を勧めていた。それを見た無音は呆れたようにため息をつく。

一体、何をそんなに大騒ぎしているのだから。

「二人とも、一応連絡入れてきたぞ」

無音の言葉に、アレンだけが反応する。だが、ルイスと店員は一切反応せず、スルー。それに対し、無音はルイスに脛を蹴り飛ばすと耳元でポケットから取り出した笛を目いっぱい息を吸った後吹いた。

「んぎゃあああ？ ……なんだ、無音か。驚かすなよ、普通に呼べば気付くつての」

「呼んでも気付かなかったから、こうして笛を吹いたわけだが。アレンの加入を正式に許可するつてよ。事情話したら直ぐにその研究施設に連絡入れて確認取ってくれた。で、アレンの今後についてなんだが……」

今から初任務とか？ なんて、目を輝かせるアレンに対し、手帳を開いた無音の第一声。

「服装は女物を着用。私服も同様とする」

任務などとは全く関係の無い、身だしなみからかよ……。一体、この組織のボスは何を考えてるんだ？

「ふざけるなああア！」

「二つ目に、君が提示した条件に関して。“事務所”の管理は原則“カフィン”に任せるものとする。そして、こちらからは一切関与しないものとする」

無音の言葉に、若干服装に関する項目の怒りを残しつつも、当たり前だといったように頷いた。

「三つ目に事務所出入りの際。こちらがつける部下を“父親”

または“母親”として、一名そばに置くこと。そして、事務所はつい最近不動産より買い取ったものと工作すること」

「まー、そのくらいなら……。ただ、親は勘弁しろよ。俺は一応成人してんだぞ？」

アレンの言葉に、横でルイスが驚いた様子で口をあけている。

「何だよ？」

「いや、まだ十六か十七くらいだと思ってたぞ」

ルイスの言葉の直後。問答無用で、彼の顔面にアレンの拳が叩き込まれる！が、ルイスはそれを平然と避けた。それに対するアレンの舌打ちを気にする様子も無く。

「四つ目」

「まだあるのか!？」

無音は無言で頷く。

「四つ目。本日を持って“カフィン”を正式に戦闘部隊【バルベロ】の十五人隊長とする」

無音の言葉に、アレンが固まった。アレンがフリーズしたのを、どうやらルイスは理解したようだが。無音には理解できなかったらしい。

疑問符を浮かべて、アレンの顔を覗き込んだ。

「どうかしたか？」

「……組織加入して即隊長格かよ」

「ああ、そうだ。がんばれよ、たまに僕が遊びに行くから」  
むんのこと場が終わると同時。アレンの視線が、とある人物一人に絞られた。

「お話は終わったかしら？」

そう。呉服店の、店員である。

それを見た無音の口元が、半ば満足げに笑ったのを、アレンは見たような気がした。

## 女性部隊という名の罠

言われたように。嫌々、仕方なく、どうしようもなく、店員に逆らう気も起きず。

アレンは女物の制服に身を包み、案内され、通された部屋の椅子に座っていた。

部屋の中には、小物や雑貨などが所狭しと並べられ、真ん中には会議室にある机といえば誰もが思い浮かべるであろう形状の机が、陣取っていた。部屋の四隅を見れば、柱を覆いつくさんといった勢いで。無数の大きなぬいぐるみが大山を形成している。

雑貨が置いてある辺り、隊員は恐らく殆どが女。流石に男が、こんな可愛らしいクマさんのキーホルダーや、猫の置物を置いて回ったりなどしないだろう。部屋の隅のぬいぐるみに関しても、男は殆どいないと思わせる。

「おはようございまーす」

元気のいい挨拶。扉の開く音。その挨拶、多分間違ってる。

もう、昼過ぎ。言うのであればこんにちはだ。

長い髪の、元気のいい女が、アレンの目の前を通過する。当然の事、彼女はアレンの存在を認識したわけだが。

「れ？ 何、この可愛い子！ あーん、こんな可愛いのに制服なんてもつたいない！ 今すぐ可愛いお洋服を……」

「黙れ、殺すぞ」

部屋へ入ってきた彼女は、アレンの冷え切った声に恐れをなした様子で。部屋の隅で人形に埋もれて休眠モードへと移行した。

「ねーえ、君誰？」

不意に、アレンの耳に彼女の小さな声が迷い込んだ。

「“カフィン”だ。今日付けで、【バルベロ】の十五人隊長を任された」

一瞬の沈黙。何か、まずいことを言ったか？

「……隊長が今日変わるって言ってたけど。まさか……カフィンってあの？」

「ああ、そうだ。で、俺は……」

アレンの言葉が終わるか否か。そのタイミングで、彼女はぬいぐるみを吹き飛ばし、アレンに駆け寄った。

「あのカフィン？　ねえ、能力！　君の能力は？」

この女……。一体、何がしたいんだよ？

「俺の能力は、そのまま黒ノ棺だ。<sup>ブラックカフィン</sup>で、さっきから。お前一体なんだよ？　大体、俺が殺すつつって今までに話しかけてきた奴居なかったぞ」

呆れた様子で、彼女に対してアレンは言い放つ。　が、彼女はそんな言葉などお構いナシだ。

「そうだな、お前は一体……何だ？」

「酷いな」。私はこの隊の副隊長さん。　ソニアって言うんだ、ヨロシク」

握手を求める彼女の手に、触れる直前。　アレンはソニアの手にある指輪に目が行った。　黒い金属で出来た、指輪なのだが。　内側に、日本の小さな棘が生えている。

「……で、その棘にはどんな毒があるんだ？」

アレンの問いに、ソニアは面白くない様子で

「ちえー、気付いちやったか。よくやるんだ、神経毒。刺されれば一時間は夢の中。その間私が好き勝手するって算段だったのに」

ふざけんなよ？

「勘弁してくれ、俺は疲れてんだ」

## 面識無しという名の罠

正直、俺は女と話す経験など殆ど無い。　というよりも、人と話した記憶が少ない。

事務所に来る依頼人であれば、必要最低限。　会話をするのだが、それも用件だけであり、いざ会話で話題を振られるとどうすればいいのやら。

それも、自分任せとなるととても困る。

「……そうだな、この隊のほかの連中は？　【バルベロ】は通常は何を行う部隊だ？」

アレンの問いは、どうしても仕事方向に向く。　が、どうやら個々での会話はそれの方がいいかもしれない。　個人経営の事務所であれば、他人との関係を持つ事などない。

だが、部下を持つとなれば部下の事は知っておく必要がある。

「さあ？　私も、会ったことがあるのはレイラとミクとクオードだけだから。　分からないよ、そんな全員の名前なんて」

予想外の答え。　まさか、副隊長を勤める人間が隊の一部としか面識を持っていない？　いいのか、そんなことで。

場合によっては、前の隊長が相当しっかりしていて、副隊長はただの飾りだったという憶測も可能なわけだが。　どうも、そんな風には思えない。

実際、部下をもったことの無い単独任務を行っていたアレンを隊長にしたくらいだ。　カリスマ性などは皆無であり、人の上に建つような人間ではない。

「……いいのか、それで」

「良いんだよ、これで。　【バルベロ】のメンバーは基本的に単体で。　場合によっては二人組みで世界各国で任務を遂行する。

【バルベロ】は独立戦闘組織だから、これで問題は無いわ」

成程。　ほぼ個人で任務を遂行する部隊……俺が配属された理由



が何となく分かった気がする。確かに、他にいれば足手まといだからな。

これでよったのだろう。

「で、基本的な任務の内容はどんなが多い？」

アレンの続けざまの問いに、面白くない様子でソニアは説明を続ける。

「基本、派遣で他部隊の即戦力が多いかな。私は前に知恵戦争

の独立戦闘部隊の指揮を任されたこともあるし、結構ハードなのが多いわ。ただ、前隊長はもっと過酷な任務に当たってたわね。

確か、天使の討伐とか、言ってたけど。私には内容を教えてくれなかったな」

天使の討伐……ねえ。中々、妄想チックな任務だな。

呆れた様子で、アレンはぬいぐるみの山の中に見つけた自動販売機でミルクティーを購入。蓋を開けるとボトルを咥えた。

「で、今日はどうしてここに？」

「新隊長を知っておけつて言う上からの命令よ。で、無音君から聞いたと思うけど……お母さん役の部下。あれが、どうも私になるみたいなのよね」

ソニアの言葉に、アレンは飲んでいたミルクティーを盛大に吹き出した。まさか、あの部下の話も本気だったのか。

「本気で言ってるのか？」

呆れた様子で、アレンはソニアを見据える。が、ソニアは結構まじめといった表情だ。

「ええ、そうよ」

いやいやいや、無理があるだろ。

「何で、俺の母親役がそんな若いんだよ？ 変だろ、お前。二十代の人間に、二十代の息子の親役が務まるわけねえって」

笑い混じりに、ソニアに対して言い放つ。

「そうよねー。そこは同意するんだけど、息子って？ 娘の間違いじゃないかしら？」

「……男に向かって娘とか言うな。虫唾が走る」  
いじけたように、アレンは椅子の上で小さく丸くなった。それを見て、ソニアは今すぐにも襲い掛かりたいといった様子で、その衝動をこらえている。

「……俺さ、昨日まで男だったんだ」

## 昨日は男という名の罖

ソニアはアレンの言葉に、疑問符を浮かべている。もちろん、突然のそんな馬鹿げた告白を信じる方が、よっぽど馬鹿だ。

「昨日の夜、事務所にて友人が遊びに来てよ……俺とじゃれてたらナノマシン打ち込まれてさ。朝起きたらこの有様だ、情けねえ」  
もはや、自己嫌悪モードの真つ最中とも言わべきか。アレンの様子は、十人見たうちの十人が落ち込んでいると答えるであろう状態だった。

「それによー。俺の本名、カフィンじゃなくてアレンなんだよな。女でアレンも変な話だけどよ、なんか周囲の視線が気持ち悪いって言うか、なんつーか。はあ……しばらく、放っておいてくれ」

「そんな言葉の直後で悪いが、カフィンに初任務だとさ」  
アレンの言葉を遮るように。そして、否定するかのよう。いつの間にかそこにいた無音の言葉が、彼に突き刺さった。

「無音……ほんつとーに心臓に悪いな。お前」

アレンは呆れた様子で、更に椅子の上で縮こまった。

「ありがとう、最高の褒め言葉だ。で、初任務は技量を測るよなもんだからな、死ぬほど簡単だ」

アレンの席の前に、一枚の写真が提示される。無音は手帳を開くと、写真に見向きもしないアレンの横でそれを読み上げた。

「最近活動が活発になってきた殺し屋。『ラビット』の討伐と結果の報告だ。情報収集はカフィンに任せると、上から命令があった。以上、初任務がんばってくれ」

アレンの前で用事を済ますと、まるで空間に溶け込むかのように。彼は歩き去った。

「へー、この子も可愛い」

ソニアが勝手に、机の上に置き去りにされた写真を手に取り、小

さく呟く。

「……ソニア……だったっけ？ 俺を、拒絶しないのか？ つーか、写真返せ」

ソニアから半ば奪い取るように、アレンはその写真を手の中に戻すと、ターゲットを確認する。が、その写真を見た途端。アレンは言葉を失った。

写真に写っているのは知った顔だ。 昨日、丁度見た顔だ。そして、アレンがこうなった原因を打ち込んだ人間の……顔だった。

「ユリア……なんでだよ」

思わず、アレンは彼女の名を口から漏らす。

「あれ？ 知り合いですか？」

「……そうだ。 昨日、事務所に遊びに着たって話。 ついさっ

きしたばっかだろ？ その遊びに来た奴……」

個々まで聞けば、ソニアも薄々それを感じ取っていた。

「こいつなんだよ」

予想通りの、答え。

## 友人殺しという名の罠

どうする？ 一回目の任務。 初仕事で、ユリアを殺せって？  
冗談じゃない。 彼女が、“ラビット”？ 任務はラビットの討伐？

無音の言葉が、アレンの脳内でグルグルと回る。 何か解決策を講じようとも、油脂阿賀標的だという現実が邪魔をする。

初めてかもしれない、こんなに躊躇する任務は。 初めてだった人のために、こんなにも何かを考えたのは。

「……アレン、泣いてる？」

ソニアの言葉に、アレンは耳を貸そうともしない。 涙が頬を伝う。

彼女を助ける術は無いのか？ いいや、あるではないか。 この組織を裏切ればいい。 だが、それだ単なる逃げにしかない。

俺が断ったとしても、他の誰かがユリアを殺すだろう。

どうするんだ？

しばらくして、アレンは吹っ切れたように笑った。 乾いた笑い声が、部屋の中に響く。

「で、もう覚悟したのかい？ ユリアって言うんだろ？ あの子、君の友達なんだろう？」

「知ってて俺に討伐しろって？ 中々、意地悪な難題吹っかけてくれるじゃねえか」

カフェでコーヒーをすする無音をどうにか探し当て、アレンは勝ち誇った様子で言い放つ。

「どうも、ユリアが標的だってんで気が動転しただけだ。 んじや、今から少し行ってくる。 あー、そうだ。 今日はいいだろ？ 事務所にこのまま帰っても」

それだけを言い残すと、アレンはビルから出て直ぐに。 車に縛

り付けてあったバイクにまたがると、エンジンを掛けてアクセルを蹴飛ばした。

もう、夕方か……。 頬を撫でる風が冷たい。 冬が、近い。

「おい、ユリアー。 鍵あけるの面倒だからそっちからあけてくれ」

アレンの声に、事務所の中のユリアが反応する。 しばらく足音が続き、前触れも無く。 事務所の戸が開いた。

「お帰りー……遅かったんだね。 で、一個相談があつてさ」

「何だ？」

ユリアから話を切り出してきたか。 まあ、後で話す手間が省けてよかった。

「ボクさ、しばらくこの事務所に潜伏しようと思つんだ。 面倒なのが、私を追つてる」

面倒なの？ まあ、居候くらいなら……。

「問題ない。 で、俺からの情報。 初任務が、“ラビット”の討伐。 つまりユリア、お前の討伐だとさ。 で、反抗するか？」

アレンの問いに、ユリアは驚きを隠せなかったらしい。 だが、

ユリアも直ぐにその言葉の意味を読み取った。

「いや、しないよ。 ボクをその吟遊詩人 <sup>minstrel</sup> に連れて意味なんですよ？ 普通に呼べば、別に何もしないものを……」

「正解。 じゃ、表にバイクが止めてある。 ヘルメット被つて、振り落とされないようにしっかりしがみ付いてろよ。 以上だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

---

大きな銃に小さな手

2011年11月30日10時48分発行